

劉心武の 1959 年の小小説 ——「謹担挫議剩高」「鍛鍛」「啞厂」——

福原 みつ希

はじめに

「謹担挫議剩高」「鍛鍛」「啞厂」¹は 1959 年に劉心武が 17 歳の時に執筆した。本稿では、これらの三篇の小小説を分析する。この時期の作品では、人間が他者に対して、無意識にある役割を強制している様子が描かれる。被役割強制者は、それに反発しながらも、自分自身も物事に対して先入観を持っているという二面性があるものとして描かれる。これらには、子供対大人の役割認識をめぐる葛藤をみることができる。「役割とは、社会的地位に付随する、社会的に定義された属性と期待の集合体である。」²劉心武の 1959 年の作品には、大人と子供の間に生じる役割認識の違いが現われる場面が表現されている。

この時期の作品についての研究文献は少ないが、見ることできた先行研究を紹介し、以下に詳しく論ずることとする。日本の研究者では、名和又介氏、渡辺晴夫氏、瀬戸宏氏が、「班主任」以前にも既に作品を発表していたことについて触れている。³だが具体的に作品分析をしてはいない。陳墨氏によれば、多くの研究者は「班主任」(1977 年)を「処女作」とみなし、そこから言及し始めている。⁴そして、その理由を三つ挙げている。それは第一に劉心武が、「アマチュア」であること、第二に「政治的観点からの配慮」、第三の理由は、「言及する価値がない」のではなく、資料が少ないため研究されていないからであるとする。陳墨氏は「班主任」以前の作品は社会と文学史にとって「甚だしい影響はない」が、一人の作家の「新時期文学中の地位と作風、創作の道筋、及びその影響と意義」の研究にとっては必要である、と主張している。そして、陳墨氏は小小説⁵だけでなく、評論、散文など初期の作品を広く取りあげて、劉心武とその社会的背景との関わりから論じる。小小説については、「謹担挫議剩高」「鍛鍛」に触れている。「謹担挫議剩高」の前に「僕公第第議撰麗」が 1959 年 3 月 7 日に《白獎絡烏》に発表されたことと、二十年後に「鍛鍛」の

題目の下に「これは十七歳の時に書いたものである。最も原始的な芸術構想があった」⁶という注が付けられたことが指摘されている。「謹担挫議剰高」について、陳墨氏は、劉心武が少年先鋒隊時代に「社会主義と共産主義の祖国は 素晴らしい陽光」になる、という信念を持ち、このことが文学創作に影響している、と言う。⁷以上のことをふまえ、この 1959 年に執筆された三篇の小小説が、17 歳の劉心武と「社会主義と共産主義の祖国」とをどのように表現しているかについても若干の考察を試みたい。

「謹担挫議剰高」(「何と素晴らしい陽光」)

「謹担挫議剰高」⁸は三人称の語り手が、中心人物である少女小英を外から観察し、彼女の内心にも入りこみ、百貨店での出来事を描写する。「お母さんの黄色い鞆を見たら、お母さんを探し出せたことになる、そのことは小英もはっきりとわかっていた。」小英は迷子になり、冒頭でこのように考えている。そこでは、「黄色い鞆を持つ人物 = お母さん」であると一直線に結び付ける様子をうかがうことができる。小英は「黄色い鞆」を探し出し、母親を見つけることを期待していた。しかしそれは小英にとって期待はずれの結果となった。「黄色い鞆を持っていたのはお母さんではなく、眼鏡をかけたおばさんだった。どうして彼女も黄色い鞆を持っているの？小英はただお母さんだけが黄色い鞆を持つことができるのと思った。」小英は「黄色い鞆」という事物に対して先入観をもち、そこから連想される「母親」と結びつけている。次節では過去に戻り、次のように描かれる。「迷子になったのは、ショーウィンドウを観に行ったからだ。さっき彼女がお母さんから離れたのはショーウィンドウの中の小熊を見に行ったから。」小英は迷子になった原因を、自身の過去の行為による、と考えている。三人称の語り手は、「小英はすぐ泣くような子供ではない。」と述べ、根拠として小英の内面の言葉に、「秀麗ねえさんにいらさせられても、まだ泣いたことがない。」と語らせる。陳墨氏は、「小英は確実にある種の並外れた 理性 を持っているが、その状況でも確実に理想的である。」とする。しかし小英は店内で大声を出してしまう。

「お母さん！お母さん！」彼女が叫ぶとたくさんのおばさんやおじさんがみなよって来て、彼女にお母さんを探し出せないの、と尋ねた。...見ている人々が取り囲んで来て、小英の目は少し湿ってきた。

小英が叫ぶと、周囲の大人は、店で「お母さん」と叫ぶ子供は迷子だ、と認識し、助けようとする。小英は「黄色い鞆」を発見した時と、「ワンピース」を見つけた時に「お母さん」と叫ぶ。「黄色い鞆」の時は、母親ではないが、ある一人の人物に向かって叫んでいるので、周囲からは本当に母親に対して言っていると見なされる。不特定の大勢の人々に向かって叫んだ場合には、彼女自身が「ワンピース」を見つけて喜んで呼んだのだけれども、人々の注意を引くような行為となり、迷子と見なされてしまう。彼女自身の「叫ぶ」という行為は、「人々が取り囲む」行為を引き出し、自身を助けられる存在へと転化させる。陳墨氏は、「皆が彼女を気にかけて、彼女がお母さんを探すのを助ける」と言う。しかし、大人が「慰め」「助けよう」とし、それを「見ている人々が取り囲み」、迷子として扱うことは、小英の「目」を湿らせる。小英は「目」を湿らせると、「お母さん」と叫ぶという行為に引き続き、自分で母親を見つけることのできない子供という役割を自ら演ずることになる。そしてそのように周囲の人々に認識させることとなる。店内の雰囲気を変えてしまった小英は、白い制服を着たお姉さんによって事務室に連れられ、店のその場から排除されることになる。陳墨氏は、「最後には、商店の放送室内のお姉さんも彼女を助けて人探しの放送をし、ついに小英のお母さんを見つけ出した」と述べている。「お姉さん」や小英を助けた人々の「助け」が「小英のお母さんを見つけ出した」とする。しかし放送をしている間に小英は事務室を抜け出している。

母親はほおずりをしながら尋ねた。「どこに行ってたの？こんなに探させるなんて。あなたは事務室にいるのではなかったかしら？」小英は力強く母親の首にしがみついたまま、「ちがうよ、私は自分でお母さんを探そうとしたの。」

迷子と認識されたあと、事務室に行き、放送によって母親を探すこととなった。しかし小英が事務室から外に出るという自発的行為は、自分で母親を探ることができる迷子、という役割を取り戻すものとなっている。母親の「こんなに探させるなんて。」という言葉と「ちがうよ、私は自分でお母さんを探そうとしたの。」という言葉は、母親と小英とのこの出来事に対する認識のずれを感じさせる。母親は、私に探させたと言い、母親が小英を探したという言い方をしている。母親は、小英が自分を探すのではなく、母親が小英を探するのである、と考えている。探すという行為が母親自身にあることを意味する。「探さ

せ」る子供が、主体的であるような表現をしながらも、実際には子供が主体となって探すということを認めていない。小英はその言葉に対して「ちがうよ」と言い、母親が探すのを待っていたのではなく、自分から探そうとしたと主張する。

小英は手に小さな花柄のワンピースを持って、お母さんとデパートを出た。太陽は本 当にきらきらと街を照らして、人の影は皆もっと濃くなっていた！小英は嬉しくてたまらない気持ちだった。

なんて素晴らしい陽光だろう！小英はついに自分で母親を探ることができたのだ！

小英は「嬉しくてたまらない気持ち」であったと描かれる。この小小説は、色彩豊かに描かれるが、最後の二節では、「太陽」が照らしている「街」の中へ出て、「きらきら」として「明るい」急に眩しさを感じさせる描写となっている。「何と素晴らしい陽光」という題名と、その出来事が締めくくられる最後にのみ描写される「陽光」は、小英が迷子になったのを不運な出来事とは捉えていないことを表現していると思われる。しかし周囲の人々や母親から見れば、小英が迷子になったのは不運な出来事である。語り手は小英と共に行動しながらも、周囲の視点で出来事を見ており、その出来事について二つの解釈の可能性を示しているように感じさせられる。

陳墨氏は、「注意すべきなのは、お母さん という言葉はこの時代、 祖国 党 および 陽光 と同義であることである」と言う。そして、「道理から言えば、“小英がついにお母さんを探せた”のは“何と素晴らしい陽光”と関連はない。しかし小英がお母さんを探すという事件を通して、社会主義時代の人と人との間の関係がどんなに素晴らしいものであるかを表わしている。それゆえ時代と社会がどんなに素晴らしいかを見出し、それゆえ“何と素晴らしい陽光”という感嘆を——心から送り出した。“何と素晴らしい陽光”は明らかに一つの“象徴”であり、またこの小小説の“主題”である。」と述べる。陳墨氏によれば、「何と素晴らしい陽光」とは「社会主義、共産主義の祖国」の象徴であり、劉心武はそれを信じていた。このことに基づいて、以上の分析結果を見直してみると、どのようなことがわかるだろうか。

「お母さん」と叫ぶことは素晴らしい「祖国」を求めることと捉えられる。そのような「祖国」を求めている態度を表明すると、大人は集ってくる。「祖

国」を自分の力で見つけ出そうとしていても、大人はそれを知らずに、声をかけ、助けようとする。お姉さんは放送、つまりメディアによる宣伝を用いて、小英の「祖国」を見つかる手助けをしようとする。小英は、事務室から出ると、「お母さん」・「祖国」を見つかることができた。放送のお姉さんに連れてこられた場所の事務室は、小英を一時的に留めおく場所といえる。「お母さん」は、小英に「こんなに探させるなんて」と告げる。この作品によれば、「祖国」は、大人や放送のお姉さんと出会いながらも、最後まで自分で探そうとした小英を称賛する、と捉えることができるのではないだろうか。大人は、小英の迷子を「祖国」とはぐれた出来事とみなし、事務室へ連れて行く。小英ははぐれてしまったように見えても、「祖国」を求めるとい意志を持つ、「素晴らしい陽光」を感じ取れる者として描かれていた。

「鍛鍛」(「妹」)

「鍛鍛」⁹は、一人称の語り手が用いられ、兄である「私」が、妹と自分の関係について「私」の内面の言葉によって語る。「鍛鍛」では、兄よりも泳げない妹という役割を、妹に対して期待する、という役割を強制する側の立場から語っている。兄という役割に束縛される「私」が表現されている。

二ヶ月前、妹は私に水泳を学びたいといってきた。私は皮肉って「おまえはそんな臆病者で水泳を習いたいと思っているなんて！水たまりさえ飛び越えようもしないような奴はプールでぐずぐず時間をつぶすようなものだ。」といった。妹はそれを聞いて怒ろうともせず、まだ私に要求してくる。「お兄ちゃんは去年泳ぎに行かなかった？だったら教えてよ。」

兄は、妹に対して「臆病者」だから水泳などできない、と言う。ここでは、兄は妹に対し、兄よりも「臆病者」である妹、という役割を与え、そのことによって、水泳を学ぶことをあきらめさせようとする。妹は兄に対し、泳ぎに行った経験があるので、自分よりも泳げる兄、水泳を教えることのできる兄、という役割を期待している。

兄は、実は泳げないのだが、そのことを妹に伝えることはしない。兄は兄としての面目を失いたくないからである。妹よりもできるという兄としての自己に対する、また妹に対するイメージを保とうとする。

夏休みの何日間か、妹はほとんど毎日水泳に行き、私もときどき同級生

と行った。プールでは、できるだけ妹と出会うことを避けた。その理由はもし妹に見破られたら、面目を失うからだ！ただし、家に帰った時は、私は威張って彼女に「どうだった？今日もまたどれくらい水を飲んだ？」と尋ねるのだ。

兄は、妹が自分よりも泳げるようになりつつあることを信じようとはしない。「兄である私が泳げずに、妹がどうして泳げるようになるのだ？妹は兄よりも下手であるのは、理屈からいって当然のことだ！」と考える。兄である私は、彼女に「おまえはまだ水泳に夢中になってる！今日はプールで少年児童水泳大会があることさえ知らないのか。」と告げる。ここには、妹に対し、兄である私よりも物事を知らない妹として彼女を認識したい、という態度が見られる。妹は、その兄よりも水泳ができない妹として扱われることを気にせず、「潜水ができるようになった。」「二十メートル泳げた。」と報告する。意図しているかどうかは分からないが、それは、与えられた否定的役割を拒否することの実践である。

以前妹が水に顔を長い間つけ続けることができた時、兄は、「妹は水泳を学ぶことにさえもこんなに強情なのだ。」と考えており、妹のことを強情だから諦めようとし、と理由づける。兄は妹の過去の行為から、彼女の個人的特質として「臆病者」で「強情」な妹だと考える。そのような役割を兄が妹に受け入れさせようとしている間に、妹は阿朱に教えてもら、という他の方法を見つけ、水泳の練習をして、水泳大会に出場する。兄は相手に自分の期待する役割を当てはめることによって、自らは努力をせずに、兄としての面目を守っている。妹よりもできるのが兄である、という「兄」としての役割を獲得しようとする。それは「兄」らしさを持っているような感覚を味わっているにすぎない。水泳ができないことを妹に告げず、面目を失うことを恐れている「臆病者」で、妹が泳げるようになっていくことを認めようとせずに、「強情」であるのは、兄の「私」なのである。

そこには、より価値のある存在としての役割を得、自らの肯定的自己像を保持するために、自分よりも弱い立場にあるものに対して否定的な役割を受け入れさせなければならなくなる人間の姿が見られる。以上見てきた2編の小説の少女は、他者の否定的な期待にとらわれずに、自らの内面から自らに与えた役割を演じる、という自発的行為によって肯定的な現実をつくりあげている。そして、これと対立するような役割を押しつけようとする者は、相手に対してよ

り好ましくない役割を押しつけ、そのことから、自らは変化することのないまま、より好ましい役割を演じている感覚を得ている。はじめに述べたように、陳墨氏はこの作品については後に注が付けられたことを指摘した。しかし、この作品と祖国と人民との関わりについては述べられていない。三篇とも少女が中心となっていることから妹を人民として考えると、祖国の状況がどうあろうとある目的のために何らかの方法を見つけ出して達成しようとする人民の姿を見ることができるのではないだろうか。

「哑厂」(「お姉さん」)

「哑厂」¹⁰は、三人称の語り手が小紅と共に行動し、外から小紅を見ながら、彼女の内面の言葉も語っている。

お母さんは、初めは小紅をつれて行くつもりはなく、彼女は小紅にはわからないかもしれないと言って、けんかになってしまった。お父さんは同意せず、「小紅を一人で家においてどうして行けるのだ?」と言って、腰をかがめて小紅の顎に手を触れて、彼女に言った。「小紅、おとうさんはおまえが騒がないってわかっているよ、そうだろう。」

母親は小紅に、「演劇を見ても理解できない」子供としての役割を与える。自らが子どもを演劇に連れて行かない理由を、子供のためを思ってそうなのだ、という正当なものとして認めさせようとする。父親は小紅に「騒がない」子供としての役割を与え、母親に連れて行かせようとする。両親とも、実際は彼女を「騒ぐ」子供と考えている。母親は「騒ぐ」から連れて行きたくないのだが、「騒ぐ」から連れて行きたくない、とは言わない。父親は「騒がないってわかっているよ」と言うことによって、母が「騒ぐ」子供だと考えている事を、遠まわしに指摘する。父親が「騒ぐ」子供でないというイメージを押しつけることにより、母親は「騒ぐ」から連れて行かないとは言えなくなる。そして連れて行かざるを得なくなる。また、小紅自身も連れて行ってもらうことを期待しているので、そのためには「騒がない」子供とまではいかにしても、母親が演劇を見に行く上で障害とならない子供、を演じる必要があるということを経験することによって悟るのである。

小紅はもちろんよく騒ぐ子供であった。彼女はちょっとお母さんの胸に飛び込んで、自分を連れていってくれるようお願いし、お母さんがうなづ

いて許してくれるのを待った後、すぐに自分から綺麗な服に着替えに行き、お母さんが片付け終わった時、小紅は既に門のそばで待つことが我慢できないでいた。

しかし、小紅はまだ役割を演じることに長けてはいない。母親にとって足手まといにならないということを示すために、自発的に服を着替えることはできた。しかし、「門のそばで待つことが我慢できない」という「騒ぐ」要素はもったままであり、不安定である。

天井にはいくつかの大きな風車がかけてあり、小紅は熱い時にこの風車が止まることなく回転することを知っていた。「風車、まん丸、ぐるぐる回る……」小紅は思わず託児所で習った歌を歌い始めてしまった。

小紅は過去に学んだことから連想されるものを見た場合、それにすぐに反応する。¹¹

「静かにしなさい！小紅、はやく舞台を見て」お母さんは小紅に不満だった。

母親は連れて行く前も小紅は演劇を「理解できない」と思っており、彼女が騒ぐと「不満」を感じている。母親にとって小紅＝「騒ぐ」、演劇を「理解できない」、「不満」であった。

舞台上ではちょうど白い鼻のおじさんが出てきて、なにかを言うと、一同皆笑った。小紅はお母さんに、「皆あの人鼻を洗っていないから笑ったの？」とかなり大きな声で尋ねた。おばさんやおじさんは皆小紅たちの辺りを見回した。

「騒がないって言ったよね？」お母さんは彼女に尋ねた。

「静かにしなさい」と母親が言うと、客席は舞台を見て「一同皆笑」い、騒がしい瞬間が訪れる。小紅は皆が笑ったので大きな声でたずねる。しかし、その状況にふさわしくない態度であったことから、劇場での平常通りの雰囲気が壊され、暗黙の了解となっている劇場特有の規則が守られないことになる。彼女は状況にふさわしい「騒がない」子供を演じることができない。「一同皆笑」っていれば、その瞬間は騒いでも許されるように考えられる。しかしその「笑」いは状況に応じた、時間によって変化する「騒ぐ」という行為である。もしそ

れに従わなければ、後に小紅が係員に連れて行かれるように、子供は排除されてしまう。

「お嬢さん、お母さんに劇をちゃんと見させてあげてね、来て、私が休息室に連れていて、お話をしあげるから」

係員のお姉さんは、小紅の母親に劇を見せるために小紅を連れて行くという。そして小紅には「お話をしあげる」から、休息室に行こうと言う。休息室に行くことは、母親や観客にとっても、小紅にとってもより好ましい状況をつくるためと考えられている。

お姉さんは...小紅がどんな話を聞きたいかを聞くと、小紅は少しもためらわずに、お姉さんに孫悟空の話をするように求めた。彼女はお父さんから何度も聞いたことがあるのに。...「お母さん！お姉さんが私に孫悟空を話してくれたの、また今度続きを話してくれるの。」続けて彼女は急に振りかえって、お姉さんにきいた「そうでしょ？」

「また今度続きを話してくれるの」という発言から見られるように、一度生じた事柄はまたあるはずだと、小紅は考えているといえる。

お姉さんはうなづいて、笑って、頭を下げて小紅の頬にくちづけをした。

お姉さんは小紅を受け入れることのできる存在として描かれている。

小紅は劇場という場においてふさわしくない、自身の「かなり大きな声」をもって、「騒がない」子供から「騒ぐ」子供への変化する。そのことによって、周囲の大人からの批判的な注目を浴び、係員によってその場から排除される。「ぎこちなかったりだらしなかったり、変な話し方や振舞い方をしただけで、世界の破壊者になってしまう」のである。^{1 2}この作品においてはどのように当時の状況が表わされているのだろうか。小紅を人民とすると、人民は祖国の要求に合わせて行動しなければならない。そしてふさわしい行動をしなかった場合は排除されてしまうが、たとえそうであっても受け入れることのできる社会を人民は求めているように思われる。

おわりに

これら 1959 年の三篇の小小説では、内容の中心となる人物が、否定的な役

割を他者から与えられている。しかし自らの目的に合った、比較的肯定的と見なされるような役割を自ら演じようとし、そのように行為する。そのことで、目的を達成する様子が描かれる。また多数の人々が集るような場で、その場にふさわしい行動ができないために、大人によって排除される子供についての描写がみられる。大人もしくは支配的な立場にある者は、子供もしくは被支配的な立場にある、状況に応じた行為をすることに長けていない者に対して、否定的な役割を押しつける。そのように子供に対してより劣った役割を演じさせようとすることで、彼らはより優れた人物であるかのように見られる。一方、否定的な役割を押しつけられてしまう者は、それとは無関係に、自らの目的の達成に合わせた効果的な行為をしていた。

これらの三篇の小小説には、ある種の役割を演じることを期待される者を中心に生ずる出来事が描かれる。1959年とは、「大躍進」の時代であり、人民も祖国も何らかの大きな期待を抱き、抱かれていたと言える。様々な意味で困難な状況にある子供は、生活の中で出会う人々に対し、協力し助け合うことを求めながらも、意志の強い自己を保ちたいという思いを持っていた。陳墨氏の「謹担挫議剩高」における母や陽光は祖国の象徴であるという指摘を参考に読みかえるとどのようなことがいえるだろうか。「謹担挫議剩高」では自分で祖国を見つけ出そうとする。しかしそれを知った周囲の人々によって、そのような意志に反して、介入されてしまう。しかし、小英は自己や出来事に対して楽観的であるともいえる。「鍛鍛」では、兄は本当はできないことを隠し、自らの面子のために相手の性格を原因とみなすような否定的な言い方をする。兄ができないことを知らずに妹が要求すると、兄はそれを要求した人物を受け入れることができない。それにもかかわらず、別の方法で成長を続けようとする中心人物妹の姿が見られた。ここに、人民はその社会にふさわしい方法で、自立的に自己を成長させつつあった様が暗示されているように思われる。「喱厂」では、小紅は自らの希望を実現するには、母親や父親の彼女に対する期待にそった行動をする必要があることを感じ取っている。小紅は状況にふさわしくない声でその場から排除された。係員は彼女が聞きたいお話をしており、小紅はそのような場へもう一度行きたいと望んでいる。人民は祖国の期待にそわなければならない、またその時の状況に合わせなければ、排除されてしまうことが表現されているように感じられる。人民は自らの要求を受け入れてくれる社会を求めているように思われる。

1959 年この三篇の小小説は、17 歳の劉心武の祖国観や、当時の社会の雰囲気と反応を少年の心に映し出したものではないだろうか。当時の社会的背景や劉心武の状況を合わせて考察すべきであるが、それらについては、まだ不十分な理解にとどまっているため、今後の課題としたい。

註

- 1 「謹担挫議剩高」は「劉瀏」の筆名で 1959 年 7 月 30 日に、「鍛鍛」は「心武」の筆名で 8 月 14 日に、「唾厂」は 11 月 3 日に、ともに《白獎絡烏》に発表された。
- 2 N・アバークロンビー、S・ヒル/B、S・ターナー著、丸山哲央監訳、『社会学中辞典』、ミネルヴァ書房、1996、281 頁。
- 3 名和又介「劉心武の小説」(『鹿児島経大論集 20』、1980)。渡辺晴夫、「劉心武の初期の作品について」(『駒沢大学外国語学部論集 10 周年記念号』1982 年 3 月)。瀬戸宏「劉心武試論——『班主任』まで」(王再清訳《嶠表》1982 年第 3 期) 嶠忽輝旗獵僥寫梢佛創《装伉冷寫梢廐鹿》(酷戀繁耐竈井芙, 310 頁。原載『中国研究月報』1981 年 3 月号総 397 号。
- 4 蛭朝《装伉冷胎》(芦師縮園竈井芙, 1996・12) 25 頁。
- 5 小小説とは掌編小説、千字前後の小説のことをいう。
- 6 《装伉冷胎》27 頁。
- 7 《装伉冷胎》35 頁。
- 8 《装伉冷獵鹿》第 6 卷(鯖纂竈井芙, 1993・12) 385 頁。
- 9 《装伉冷獵鹿》第 6 卷 383 頁。
- 10 《装伉冷獵鹿》第 6 卷 387 頁。
- 11 これは「班主任」(《装伉冷獵鹿》第 4 卷 8 頁。原載《繁耐獵僥》1977 年第 11 期。)で謝惠敏の「組織活動」「新聞で推薦されていない本」などに対する態度を連想させる。
- 12 E・ゴッフマン著、佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い——相互行為の社会学』(誠信書房、1985) 81 頁。

